

## 十九世紀の〈旅路〉

山本和明

### はじめに

人はなにゆえ旅をするのだろうか。何を目的として旅するのだろうか。ふとそんな思いに駆られることがある。携帯電話やデジタルカメラで風景やモニュメントを撮影し、綺麗に写っていればそれで良しとする旅人たちの姿を、最近よくみかける。そのあと、そそくさと食べ物や土産物売り場へと猛進する姿は多くの観光地で繰り広げられている。

次から次へと目的地を消化し、途中の経路なんてどうでも良く、観光地から観光地へのワープが繰り広げられている。なんとも忙しい話だ。それは事前に計画された旅、蒐集された〈情報〉をもとにしての行動なのだ。いわば、事前情報を消化・追認するために旅がある、と云っても良いだろう。

デジタル化した旅の想い出は、外部装置に記録を委ねており、人間の内部には記憶すら残っていないのではないか。ときおり再生された写真（映像）を観ることで、自身の軌跡なのに、まるではじめて観るかのように振り返りみることもあるのだろうか。

私自身は、目的もなくふらりと車で旅行するのが好きだ。広島あたりまでは国道を通って行ってみたりもする。だが、それとて与えられた道筋を通るものにすぎない。ふらりと、しかし安全な経路にしたがい行くのみであることがふと心をよぎる。

さて、ここで昔の旅に想いを馳せてみよう。云うまでもなく昔の旅は徒歩である。今日ほどの〈情報〉もない中で、いかなる旅が繰り広げられてきたのか。目印もない田圃のあぜ道をひたすら歩き、旅をした時代。そうした時代に想いを巡らすのである。雑駁に捉えて恐縮だが、そうした旅のあり方が大きく変動をみせたのは十八世紀後半から十九世紀にかけてであった、と思う。十九世紀といっても、既に明治の時代を含み、鉄道の時代に突入している。徒歩から鉄道へ。その時代をいかに記録し、文学的世界は表現しているのか。少し考えてみたい。

（補記）本稿について申し述べておきたい。相愛学園創立一二〇周年記念公開講座で「十九世紀の〈旅路〉—江戸小説の描く世界—」（二〇〇八年十二月六日 於 本学南港学舎）と題し講演した。本稿はそのおりに作成した準備稿の一部をとりまとめたものである。先学の研究や拙稿などを踏まえており、新たな知見に乏しい点は否定できないが、あえてその

ままとした。ご寛恕いただきたい。

## 旅する庶民

旅が盛んになるのは、江戸幕府によって慶長九年（一六〇四）に日本橋を五街道の起点として定められ、街道が整備されて、それを民衆が利用するようになってから、と考えられがちだが、近年の研究（国立歴史民俗博物館『江戸の旅から鉄道旅行へ』二〇〇八年）をみれば、実際には逆なのだという。社会の中で自然に作られてきた旅行のシステムを体制化したのが、江戸時代の街道と宿場の制度なのだ。用向きのある人間は、金銭さえあれば確実に遠距離の旅を行えたとする。とは言え、旅が広く普及するためには、街道として整備されることは重要だろう。東海道が完成したのは寛文元年（一六六四）。中山道で元禄七年（一六九四）。甲州街道は明和九年（一七七二）に至って完成している。本陣・脇本陣などが整った宿駅制は、本来、参勤交代などの武士のためのものであったが、その道筋を通じて一般庶民も街道を通じて旅をする。すると、茶屋や旅籠屋、木賃宿などが宿場に生まれていく。庶民の往来も時代を経て徐々に増えていったと想像される。

参勤交代する大名たちは、決して各地を見物してまわるような旅をしたわけではなく、その旅路に面白味を求めることは出来ない。一方の庶民の旅は、と云うと、伊勢参宮や西国巡礼など、寺社参詣が中心だった。町や農村から往来手形をもらい、ときには抜け参りの形で、一生に一度の思いをもって旅立っていったのである。商用の旅などは

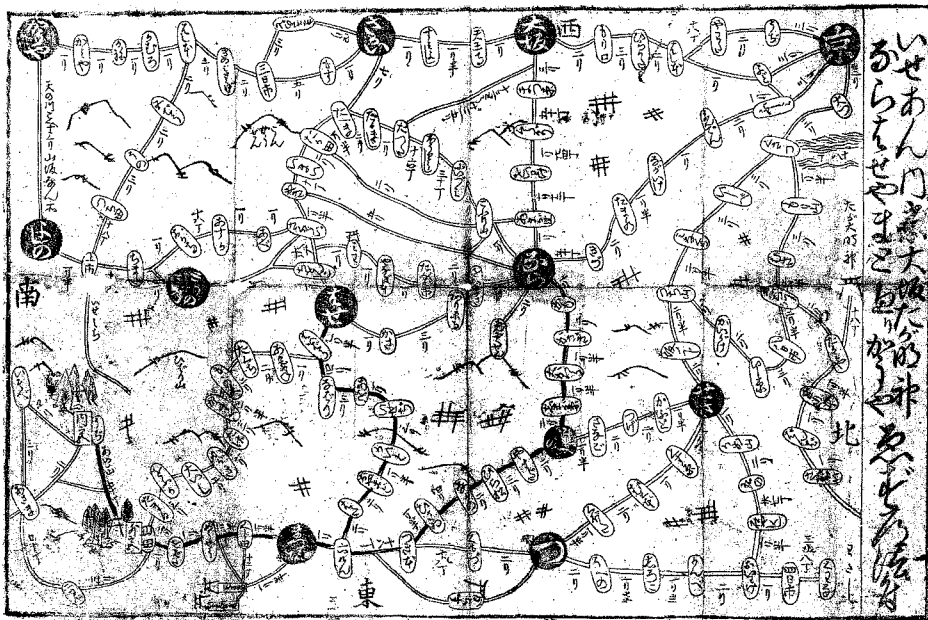
別にして、通常、旅は数人から数十人が一団となって行われ、旅の行程は行く前にほとんど決まっていた。不安と隣り合わせの旅だからこそ、茶屋や宿場の所在に敏感であったと思われる。

ここで、架蔵の一枚刷を眺めてみたい【図版①参照】。

「伊勢案内・京・大坂・多賀明神／奈良・長谷・大和廻り高野／絵図道法付」と題された江戸後期の一枚刷は、宿場と宿場のあいだの里程を示すのみであり、旧蔵者によって朱筆で旅の経路が辿られている。恐らく奈良から出発し、（伊賀）上野、松坂を経て伊勢内宮へ。帰りは再び松坂を経て長谷へと詣でていると思われる。その経路を奈良から賀茂へ二里、賀茂から笠置へ二里という具合に、所要所要の里程が示されるのみである。旅人はこうした一枚刷を携え、道標を頼りに歩みを続けていた。今日の吾々からすればほとんどへ情報らしい情報<sup>すまか</sup>が記されていないが、当時の旅人にとっての命綱であつたろう。主要街道をのぞけば、道も荒れ、途中に休む茶屋もないこともある時代に、進むべき指針となっていたはずである。

月日は百代<sup>はくたい</sup>の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬口<sup>うまぐち</sup>とらへて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖<sup>すまか</sup>とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて：

「おくの細道」より、冒頭の有名な一節を引用してみた。旅と文学というテーマでは、きまって芭蕉の「おくの細道」の旅が採りあげられる。元禄二年（一六八九）三月、芭蕉は門人曾良とともに陸奥へと



【図版①】

旅立ってゆく。その旅は宗祇など古人追慕の旅であり、各地に残る歌枕を求めての旅路でもあった。点と点を結ぶこと、すなわち歌枕と歌枕との間を結ぶ行程が、線となって旅路を形成していく。まだ街道整備も儘ならぬおりゆえに「古人も多く旅に死せるあり」と死をも覚悟の旅路とする芭蕉の決意は、あながち旅に臨んで特別なものではなかった。ただし芭蕉の場合には、各地に門人がおり、俳諧ネットワークが形成されている。要所要所で歓待をうけるのである。見知らぬ旅先、土地勘のない不安はその土地土地の門人たちの存在によって解消され、その地の人と俳諧をたしなむひとときを過ごした。旅先に知人がいるといえないとは全く、旅そのものが異なる。当時、立て看板があるわけではない。歌枕の地であるか否かも、その地元の誰に尋ねても知っているものではあるまい。考えてみれば至極当然であろう。宿所の確保、地元の情報など、様々な情報が芭蕉のもとにもたらされる状況にあった訳で、庶民に比して、このうえなく安全な旅だったと言える。

「浪花講」の原型がようやく成立したのは文化三年（一八〇六）前後。旅館同士で組合をつくり、この講に加盟している旅館は安心であると宣伝された。見知らぬ地に足を踏み入れる人々にとって、宿所の安全が保証されない限り、旅に不安がよぎる。西国三十三箇所・四国八十八箇所・金毘羅詣・伊勢参宮など寺社参詣中心とした旅のありようも、信仰の旅から、見物・行楽の旅へと変貌をみせるためには、宿所の安全や、情報の整備（次章参照）なしには成立しえないのではないだろうか。「講」が整う十九世紀までの段階で、街道に宿場は徐々に形成されていく。医師でもなく僧侶でもなく、俳諧師でもない、こ

く普通の人々の旅する時を迎えたのである。十八世紀後半から十九世紀にかけて旅のあり方が大きく変動をみせたのではないかと、と本論冒頭に述べたのは、そうした状況の整う時代が到来したことを云いたかったのである。例えば、次の表現などは、当時の旅の盛況ぶりを語ってくれているように。

うらやすの国ひさしく、民作業をたのしむあまりに、春は花の下に息らひ、秋は錦の林を尋ね、しらぬ火の筑紫路もしらではと械まくらする人の、富士筑波の嶺くを心にしむるぞそぞろなるかな。

伊勢の相可といふ郷に、拜志氏の人、世をはやく嗣に譲り、忌こともなく頭おろして、名を夢然とあらため従来身に病さへなく、彼の旅寝を老のたのしみとする。季子作之治なるものが生長の頑なるをうれひて、京の人見するとして、一月あまり二条の別業に逗まりて、三月の末吉野の奥の花を見て、知れる寺院に七日ばかりかたらひ、此ついでに「いまだ高野山を見ず。いざ」とて、夏のはじめ青葉の茂みをわけつゝ、天の川といふより蹠て、摩尼の御山にいたる。

安永五年（一七七六）刊『雨月物語』『仏法僧』の一節である。『雨月物語』には、ことのほか旅を扱ったものが多い。この「仏法僧」の冒頭の文章は、旅ののどかな光景、遊山の様を描いてやまない。板坂耀子氏によれば、「この安らかな御代に、のどかに旅ができる喜びと感謝を述べ、その旅の案内のために、と名所の記述にとりかかるの

が、名所記の書き出しの一つの型をなしている」のだという。そうした型を反映しての文章であった。もちろん、本話末尾を読んで振り返りみると、全く別の様相がみえてくるのだけれども。「筑紫路もしらではと械まくらする人の、富士筑波の嶺くを心にしむる」と人々の想いを馳せるのは、西国から東国までと範囲が広い。

そのような旅が盛んな中、そぞろに旅を楽しむ作中人物夢然親子は、伊勢から京都二条を見物し、吉野、高野山へと旅を続けていく。七里結界をひいていることも知らず「此ついでに」、高野山へと向かうのである。現代の旅慣れた人から見れば、この吉野から高野山へとという行程はいささか腑に落ちないだろうが、先の一枚刷にも「天の川越十三里山坂難所」と記される。難所ではあったが、実際の旅の経路であった。ここで「此ついでに」高野山へ向かうことは、旅宿の手配がなされていないことを意味する。二条は「別業」即ち別荘であり、吉野は「知れる寺院」に旅宿しているのに対し、高野山へと向かう夢然父子の行動は、あまりに無謀な行動にみえてくる。宿の保証もないならば、旅は途端に迷い道となろう。宿所の確保は旅する第一歩なのだ。

それにしても、おくの細道の旅にせよ、「仏法僧」にせよ、先の一枚刷に示された旅路にせよ、旅の経路において、往路と復路とを異にする周遊コースであったことは、当時の旅のあり様を反映している。数泊の旅でさえ、誰しも気ままに行くことが出来るというのではない。そのため、一旦旅にでるならば、少しでも多くの寺社や名所旧跡を観て廻った。往復の旅路を、合理的に、時間に追われ同一の経路にしがちな現代人にとって、こうした周遊化は見習いたいものである。

# 〈情報〉としての旅

旅先の〈情報〉は、十九世紀に格段の飛躍を遂げて旅人にもたらされたと思しい。近世初頭にも歌枕の名所案内的役割を担った「名所記」の類が作られてはいる。物語仕立てで、狂言回しの主人公が名所を尋ねて廻り、その名所について説明するのだが、しかし、その内容は簡便であり、現実味に乏しい。実際の旅路に本当に役に立つものであったか、甚だ疑わしいのである。

安永九年（一七八〇）、「名所図会」となる最初の本『都名所図会』六巻が刊行された。天明七年（一七八七）『都名所図会拾遺』、寛政三年（一七九一）『大和名所図会』、寛政八・十年（一七九六・九八）『摂津名所図会』、享和元年（一八〇一）『河内名所図会』と多くの名所図会が引き続き刊行され、寛政八年（一七九六）から文化三年（一八〇六）ころまでは、一種「名所図会」ブームといってもよい時代が到来した。ちなみに『都名所図会』など、一年の製本が四千部を越え、刷った本紙に表紙と綴じ糸を添えて売り渡したと伝えられるほどであったという（『異聞雑稿』）。

歌枕に必ずしもこだわることなく、実地調査に基づき名所を網羅し、埋もれていた小さな「摂社・草庵たりとも一字も洩らさず」（『都名所図会』凡例）取り上げていく。その姿勢は「神社の芳境、仏閣の佳邑、山川の美観等、今時の風景をありのままに模写」（同）することとを標榜する。かつての歌枕も描くが、「今時の風景」をも描き、精緻な絵をふんだんに挿んでいく。多くの書冊をうまく整理し、編纂された啓蒙書となりえている。そういえば「図会」とは図の集積の謂い

であった。

この名所図会の登場によって、人々は見知らぬ世界への興味をかき立てられたことだろう。古き「歌枕」の世界から離脱し、事実への志向を十分に満たしてくれたはずである。十九世紀に至って、人々の往来も盛んとなるなかで、その旅路の糧ともなりうるような情報の書冊が登場したのである。往来する人々の知識欲・情報収集欲を満たし、時には、旅することが出来ない人たちにまで、見知らぬ世界への知識欲を駆り立て、紙上での旅路を繰り広げていったことだろう。

名所図会の登場は、一面「名所」すなわち歌枕として名のある所、旧跡を再発見することに繋がった。過多なまでの情報の呈示は、それまで忘却の彼方にあった土地土地に「意味」を見いだし、人々を近郊の「物見遊山」へと誘っていったのではないだろうか。旅をするには多忙すぎ、手形をもらうなどの手続きを必要とする近世期において、遠くでなくとも身近なところに気晴らしに遊びに出かける。その場所を呈示してくれているのである。

## 「旅」を描く

庶民の旅が盛んになると、多くの初心者たちを目当てに、種々の道中案内記・入門書が刊行されていく。文化七年（一八一〇）に刊行された八隅声庵『旅行用心集』はそうした書冊の一つだが、そのなかに「○道中所持すべき品の事」という一節がある。

一 矢立 扇子 糸針 懷中鏡 日記手帳一冊 櫛ならびに髪付油

但シかみそりは泊屋にてかり用ゆべし。又髪ゆひもあれども只途中又は御関所城下等通る節びんのそげざる為なり。

一 挑灯 ろうそく 火打道具 懷中付木

是はたばこを吞ぬ人も懷中すべし。はたご屋のあんどうはきへやすきもの故、不慮に備ふべし。(以下略)

ここに「日記手帳一冊」とあることに注目したい。

短い旅や物見遊山はあまり記録に遺すことはしないだろうが、長旅ともなれば、人々は日記を書き記した。日記といっても、ほとんどが簡条書き程度のもので、諸事些末なことを書き記した写本など拝見する機会も多い。寓目した範囲では、日々の旅でいくら食事に費やしたか、どこに泊まったか、距離はどれくらいか、宿賃はいくらかといったことが大半である。こうした記録を遺す目的は、自身の備忘ということもあるが、次に旅する家族や子孫たちの参考となるためだと云う。

時折数行にわたってこと細かくその日にあった出来事を書き記していて、意外に思うことがある。今日からみれば一瑣事にしかすぎないと思える事柄がこと細かに記載されている。なぜか。その理由を考えるときに、板坂耀子『江戸の旅と文学を歩く』(ペリカン社・平成五年十二月)の解説が一つの指針となる。

いささか誇張するにしろ、事実拘泥するにしろ、近世の旅人にとって、旅先でそのような語るにたる奇談が採取できないのは、旅そのものを不完全と感じさせるほどのものであったらしい。

本居大平は『有馬日記』の中で、面白い話が充分に集められないのをあせり、しきりと同宿の旅人たちを訪問して記事の採取につとめている。

我々が旅をするとき、その土地に関わる情報を、書物かなにかで事前にみてかからないと通り過ぎてしまうことも多い。それは経験として誰しもあることに違いない。情報収集は容易なことではなく、土地土地の人々との交流はなかなか難しい。名所図会などの登場は、その土地ごとの名所旧跡など、さまざまな情報を書冊のなかで消化し、地元の人に尋ねる必要を生じさせない。その旅路のなかで、あえて地元の人と交流し、「語るにたる奇談」を採取するというのである。

土地に根ざした話を、突然旅人が話しかけ、情報収集することなどは、今日でも、実際の問題として、困難を要するものであろう。例えば、文化四年(一八〇七)年刊、鳥翠台北基『北国巡杖記』序に「あたし海山の望みも月花の情もしらず、ひとへに旅はうきものとのみおぼえて、いたづらに行めぐる人は宝の山に入ながら手をむなしうすともいふべし」とある。「宝の山」を分け入ることなく「いたづらに行めぐる人」がむしろ大半だったはずである。

写本で伝わる道中記の中には、旅先の土地土地に関わる情報が蒐集されてはいるものの、土地の人からの見聞記事ではなく、自身の旅路のみを淡々と記載していることもあるが、それも道理であらう。簡便な案内記の類や名所図会などが重宝されたのも無理からぬところであらう。

それゆえにこそ、日記などにその日にあったことが記されるという

ことは、何かしら地元の人と交錯する出来事、記憶に残ることだったのではないだろうか。

この「語るにたる奇談」を採取するという点では、橘南谿『諸国奇談／西遊記』（寛政七・十年刊）をはじめとする寛政年間（一七八九～一八〇一）に流行した「諸国奇談」の存在も忘れてはなるまい。諸国の具体的な情報については名所図会を閲ればことはすむ。それでも「諸国奇談」が流行した背景には、今まさに「採取」された話の鮮度、旅人の実体験談であるという実況感にあったのではなからうか。

具体的に考えるため、一つの話を採りあげてみよう。既に拙稿で触れた話ではあるが、寛政十三年（一八〇一）に刊行された一無散人『東遊奇談』巻之四に収まる「伊達の墨塗」という話である。短い話

なので全文を掲げておく

#### 【図版②参照】



【図版②】

奥州伊達の郡築館こほりつちやうだんといふ所に年を取、春を迎へし事あり。こゝに正月十四日墨塗と云事あつて、はじめて嫁を迎へ聲を取り家に行て夫婦のもの、顔に墨をぬる事を祝ひとす。年々の例なれば兼てあた

らしき夫婦は其日を心得、たとへ親しきゆかりのものたりともゆだなく近よらざるやうに立まはり、すわといはゞ逃出門と用心するこそおかしけれ。人々、此日は是を興じていろ／＼心附ざる斗暑にて、思ひがけなき所を引とらへてぬる事なり。吾止宿せし家にも新らしきありて、翌日は墨塗られん事を宵より覚悟して別座敷にやこもらんなどいひ合せ居たりしが、夜明ていまだ目さへ覚ざるうちに、宵のほど夜ばなしに來りし六十あまりの老人重郎治といふもの来て、「よべ、たばこ入をうしなひたり。見てたべ」などいひて、そここゝさがしければ、かの嫁何のこゝろも附ず、とも／＼に其あたりを見まはり近よりけるを、引とらへてはうど塗る。聲こらへず、後より「是はいかに」といひつ、引のけんとしけるに、ふりかへりて又べつたりと聲の顔へも祝ひける。

此家に今年八十の翁ありて、是を見つ、よろばひ出、「重郎治、よい年をしてたしなみめされ」といひけるを、「お手前も」といひながら、又翁が顔へもぬりつけて、早々逃てかへりしなり。吾は奥座敷にこもりしが、何か勝手かたての賑ひけると見に出ければ、常々たはれごと嘶し合たる婆嬬ども四五人うち連来て、斯やがて我にぬらんとす。思ひ寄らねばおどろきて、もとの一間に逃けるを、追々にかけ入て、した、かにこそぬりたりけるこへにおどろき、其家の人々女どもを追とり巻、あるひは鍋炭・する墨など取々にぬりかへし、数多あまたの男女うちみだれ、たがひに顔はまつ黒にぬりにぬられてた、かひけり。はじめはあたらしき夫婦のみなりしが、後には大軍に成りて、村中の家々、主も家来しやうも、老たるも若きも、尼も坊主も入乱れ、顔真黒にぬられつ、泣上戸あり、笑

ふあり、酔たるも酔ざるも、実<sup>じつ</sup>春の人心、おもしろかりける遊びなり。

奥州伊達で年始を迎えた作者一無散人は、新婚の夫婦の顔に墨を塗る地元の風習を目の当たりにする。「吾止宿せし家にも」「吾は奥座敷にこもりしが（略）常々たはれごと嘶<sup>さ</sup>し合たる婆嬢ども四五人うち連来て、斯<sup>が</sup>て我にぬらんとす。」と散人自身も巻き込まれてゆく。「いたづらに行めぐる」ことなく、地元の人々とともに過ごしたひとときは、「またはじめてそのさかぬにしもいまきたらんこ、ちこそすれ」『東遊奇談』序と、読む者の眼前にその光景を再現してみせている。

著者の一無散人は、近世中興期に活躍した京都の俳人、岸丈左のことである。薙髪し、東国へと旅したのは「翁世になくなりて百年のとしにあたるに、（略）洛の丈左はふし、翁の杖の跡をしたひ、奥羽の間にさまよひありきて」（寛政八年『狭名辺墳集』成美序）とあるように、芭蕉を慕ってのことであつた。「七とせの後、洛に帰ふた、び一無庵のとし火をかゝげ」（『俳諧八仙歌』蘭更跋）と、永き諸国行脚の旅を経て書き記された『東遊奇談』は、多く丈左の見聞として得られたものと考えて宜しかろう。引用の巻四「伊達墨塗」の舞台でもある「奥州伊達の郡築館」のふもとには、門人連桑庵律大（『俳諧八仙歌』後叙）や暦庵庵竹冠（『狭名辺墳集』跋）が居り、そうした知己の存在ゆえに「たはれごと嘶<sup>さ</sup>し合たる婆嬢ども」とも馴染みになりえていたのだろう。文中の「常々」の一言から、そう想いを巡らすのである。

深くその土地土地の情報・逸話を蒐集し記載されている書冊―時に

はそれは奇談の類とされた―の多くは、地方にネットワークを持っていた俳諧師たちや学者たちといった面々によって書き記されたものが多い。しかし、繰り返しになるが、土地土地の人々との交流はなかなか難しい。俳諧師はその土地に門人などがいて交流を保証された存在である。しかし、それは一般の旅人にとっては、望外のことでしかなかったのではあるまいか。いかにして土地土地の人と交流するか、が問題なのである。

### 笑いという交流

旅を記した文学作品のなかで、近世後期を代表するものに十返舎一九『道中膝栗毛』があることは周知に属しよう。享和二年（一八〇二）に始まった膝栗毛の旅は、弥次郎兵衛・喜多八の二人連で東海道を歩み、厚かましく愚かな行動をくりかえしてゆく。正編十八冊が終ると、続編二十五冊として金毘羅、宮島、木曾街道、善光寺などを見廻り、完結したのは文政五年（一八二二）と、実に二十一年もの長きにわたる旅路であつた。「編を累るままに、古き洒落などをまじへ、且相似たる事多けれ共、看官は其所らを意にとどめず、只笑を催すためたしとして飽く事なかりしかば、板元はさら也、貸本屋等も、利あるもの、是にまされるはなしと云にき」と馬琴『近世物之本江戸作者部類』も評している。

旅は、その旅先旅先が常に新しい情報の場であり、小説作法の上から言えば、場面転換が容易で、全体の構成を必要としない。いつ終わってもよく、あくなき繰り返し（ワンパターン）をも可能とする。後



期滑稽本の多くは、この繰り返し、即ち「終わらない（逆に謂えばいつでも終えることのできる）」形式に特徴がある。いつまでも道中を続ける『膝栗毛』、次々に入浴客を迎える『浮世風呂』、茶番をやり続ける『八笑人』などをみても、そのことは領けよう。

この『膝栗毛』について先学はどのようにみているのだろうか。いま中村幸彦氏の見解（小学館日本古典文学全集解説）を、参考までに紹介しておく。

一九の土地土地の社寺名所の案内の挿入を、古い『東海道名所記』と同じように、一種の旅行案内の目的をも合せもったかとする説もあるが、これもそうではあるまい。『膝栗毛』を最も興味深く読み得たのは、すでに東海道・伊勢参宮の旅の経験のある人々であった。参勤交代で何回も、そこを通った松浦静山侯のごときは、どれほどこれを面白く読んだであろうか。二人の道化者の失敗の場面の背景は、かつての旅の記憶にある。（略）

『膝栗毛』には、東海道筋の人々の狂歌や俳諧の発句を、画賛に掲げている。彼らは自分の土地が、それこそ初めて小説の舞台になったことがうれしくてたまらない、それぞれの土地の読者の代表者なのである。

『膝栗毛』を読んで思うのは、その記述をみても、なにも旅先のこととが詳細に分かりはしないということだ。描かれているのはあえて、その土地ならではの情報ではなく、むしろ、そうした記述はサワリ程度でしかない。詳細な情報を求めるなら、名所図会などのほうがよ

ど詳しい。おそらく旅の経験者やその土地の読者にとつては、それでも十分嬉しくてたまらなかったのだろう。鞠子のとろろ汁、桑名の蛤などといった街道の名物は、膝栗毛などの人気とともに、人々の知るところともなっている。わずかに記述される、それだけでも評判となりえているのだ。

しかし、実は『膝栗毛』が伝えたかったのは、その土地土地の人々とのいかに交流していくか、という点ではなかったろうか。

やがて此駅を打立けるが、今もどしし道をますぐに、ほどなく弥勒といへるにいたる。爰は名におふあべ川もちの名物にて、兩側の茶屋、いづれも奇麗に花やかなり。△ちや女「めいぶつ餅をあげりやアし。五文どりをあげりやアし」△弥二「おいらアゆふべ、式朱がもちをくつて來たから、モウこ、ではくふめへ」△北八「そふさく」ト此内あべ川の川ごし道に出むかひて「どんな衆おのほりかな」△弥二「ライ。きさまなんだ」△川ごし「かはごしでござります。やすくやらずに、おたのん申ます」△北八「いくらだ」△川ごし「きんによりの雨で水が高いから、ひとりまへ六十四文」△北八「そいつは高い」△川ごし「ハレ川をマアお見なさい」ト打つて川ばたに出、△弥二「なるほど、ごうせいな水せいだ。コレおとすめへよ」△川ごし「ナニおまい、サアそつちよヲつんむきなさろ」ト二人をかたぐるまにのせて川へざぶぐとはいる。△北八「ア、なんまいだくく目がまはるよふだ」△川ごし「しつかりわしがあたまへとつつきなさろ。ア、コレ、そんなにわしが目をふさがつしやるな。向ふが見へな

い」△弥二「なるほど深いハ。コレおとして下さるな」△川「し  
「ア二おとすもんかへ」△弥二「それでもひよつと、おとしたらど  
ふする」△川「ハレおとした所が、たかでおまいは、ながれ  
てしまはしやるぶんのことだ」△弥二「エ、ながれてたまるもの  
か。イヤもふきたぞく。ヤレく御くらうく」トかたぐ  
るまよりおりてちんせんをやり△弥二「ソレべつに酒手が十六文  
ヅ、」△川「ヘイコレハ御きげんよふ」ト川ごしはすぐに川  
かみのあさいほうをわたつてかへる。△北「アレ弥次さん見ね  
へ。おいらをばふかい所をわたして、六十四文ヅ、ふんどくりや  
アがつた」

川ごしの肩車にてわれくをふかいところへひきまはしたり  
（『道中膝栗毛』三編より）

描かれているのは何だろう。この場合、名物「安倍川餅」がでく  
るものの、それよりも川越しとのやりとりに重点がある。そこには何  
の知見も蘊蓄も存在しない。川越しに、してやられた弥次郎兵衛と喜  
多八は、時には本人同士でふざけあい、時にはこうして地元の人との  
接点で、笑われる存在として描かれる。これもまた地元との邂逅の一  
つなのではないか。笑われるような存在であることは、その土地土地  
の人々に笑いをもたらすことにも通じる。何もせずに通過していく旅  
ではなく、その宿場宿場でふざけあい、「事件」をおこす旅路。自身  
も参加して、地元の人々と交流し、「語るにたる」おろかな行動の話  
を採取したとすれば、それは、旅にあこがれる読者たちにとって、笑  
いを興しながらも、旅のありかたとして一種ありたき理想という側面

もあつたのではないか、ふとそんな想いに駆られるのである。

### 失われたものへ

時代は下る。明治五年、新橋横浜間に鉄道が開通した。十九世紀も  
終わりを告げようとする明治二年（一八八九）には早くも東海道線  
が完成する。より速く、より遠くへという、新しい「旅」の時代が到  
来したのである。日帰り旅行にせよ、温泉旅行・海水浴・初詣の旅に  
せよ、鉄道の果たした役割は大きい。このことについては「江戸の旅  
から鉄道旅行へ」や、文学研究の側からも近年精緻な研究がなされつ  
つある。

明治という時代には、誰でも自由に移動可能となった。しかもそれ  
に鉄道が加わる。歩いての旅は、姿を消し、鉄道旅行の時代に入った  
のである。徒歩なら数泊を要したところも、日帰りから一・二泊の旅  
行で可能とした。鉄道が利用出来るようになると、一般人でも長距離  
の移動が、楽に出来るようになった至便性は大きい。近場にも変化を  
もたらした。都市近郊でも、鉄道会社主導で、停車駅ごとに新たな観  
光の地を見だし、乗客を惹きつけていく。

旅行者の道中は車中になった。旅の目的地近くまで一気に移動可能  
であることは、旅路での地元の人とのどかな交流を絶やし、食べも  
の一つとってみても、駅弁などにとって替わられていく。かつての宿  
場や名所・旧跡は線路から遠く、利便性という観点から次第に忘れ去  
られてゆく。都市近郊の観光地化とは裏腹に、街道は衰退していくば  
かりとなる。人々は簡便なパンフレットで情報を得、高速化された鉄

道で旅をする。「語るにたる奇談を採取」しようにも、時間が許してくれないのである。与えられた情報を消化し、「観光」と称してパンフレットに示された勝景地を眺めれば事足りた。土地土地の人々との交流は薄れていかざるを得ない。

その是非を今は問うべきではないだろう。ただ、考えておきたい。旅の醍醐味はその土地土地の人との交流にあった時代の存したこと。十九世紀の〈旅路〉を辿ることで、旅はどうあるべきか、何を求めるのか、ふと立ち止まって考えてみたいものである。